

# SIS 社会科での、教科と授業づくりの工夫点

～学園創設 15 年目の「千里の社会科」の一覧書として～

野島 大輔  
SIS 社会科

## 1. 序

早いもので、千里国際学園がのどかな小野原の丘に創設されてから、15 年が経っている。社会科の教科の構築に当たって、福田國弥学園長（当時）から、「日本の教育をひっくり返してください。」「私は、文部省（当時）のやることは皆、反対です。」と並々ならぬ意気込みを伝えられ、OIA（大阪国際文化中学・高等学校の略称、現千里国際学園中等部・高等部 SIS の旧称）校長（当時）からは、「教科の内容は全て教員が立案しなさい。」「ただし、帰国生徒のよさを最大限に活かす授業にしなさい。」と叱咤され、やりがいと重い責任とを同時に感じさせられた事を思い出す。

“自由と責任”は、生徒の学習・生活の指導の面でその後も現在まで根幹的な校是となっているが、これは教員の毎日の職場生活にもそのまま該当した。これまでにない新しい学校づくりに際して、当初は当時の国内の学校の通念から見て贅沢すぎるほど潤沢な環境が与えられ、ほとんど既存の様々な制限による拘束がなく、思う存分手腕を振るえる可能性が与えられた反面、仮に達成できない事柄があれば、それはそのまま我々教員の未熟さと限界とを示すものであった。初代の教科主任は、「ここはセンセがしんどいガッコやで！」と叫んで、文字通り机に突っ伏していた。まさに「自由の刑」に処せられてしまったのである。

東京都立の定時制高校から赴任してきた筆者は、障「害」を持つ生徒やマイノリティ生徒の指導のあり方について、ことごとく行政との相克を経験していたので、4 畳半から大海原に棲家が変わったような感覚であった。一方、狭い檻の中で拘束を受けることは、同時に保護を受けていたことでもあったことにも気付かされた。従って、自由な航海が保障されるということは、技術の担保がなければ生徒を連れたまま遭難するかもしれない、という危険に乗り出すという決心を嫌が応にも迫られるということでもあった。本校紀要 11 号で報告した「自由」についての授業実践報告は、教員の側にとっても実際に相当な切実性を帯びつつの、実存を賭けた「参加型」の授業づくりだったのである。

その後、震災を契機として学園の財政に危機が訪れ、国内・国外の教育事情も相当に変化した。特に、帰国生徒教育をめぐる社会事情は一変したとあってよいだろう。筆者が本紀要に連載してきた『ジョイント・スクールより』の報告論文は、本学園の創設に関わってこられた様々な人々や、都立高校の諸先輩方を含む本学園の発展に願いを寄せてくださった方々へ、上のような環境で教員生活を営む事ができた者の責務として記してきたものであったが、このような経緯のため連載を始めた当初の形態では継続できなくなってしまった。生みの喜びと、続ける苦しみとを、同時に味わってきた、というのが今の実感である。

学園創設以来 15 年の歳月を過ぎた今、本学園が死に物狂いで取り組んできた様々な成果のいくつかは、他の先進的な諸校において既に今日見る事ができるものとなり、それらの成果が果たして“本物”であったかどうかは問われている。（例えば「総合的な学習」の設置がもう 4～5 年早ければ、私たちはあれほどの徒労を経験せねばならなかったであろうか。）筆者は主に国際理解教育の観点に基づく、国際関係や比較文化の分野の授業を中心に担当してきたが、実社会や研究界でのこれらの分野の進展は目覚しく、国内の国際理解教育の広がりについても隔世の感もたらされている。足を止めて充電を要する時機となった現在、これまでの実践についての記録と、その成果の報告の意味から、それらの記録と新たな方向定め思索の必要性を想起したのが、本稿の目的と執筆の動機である。

## 2. “工夫”の原点

授業の企画・運営・立案がほとんど全て現場の教員に任されていたといっても、生徒の実態を踏まえず、時局のわきまのない、学問的な根拠がなく現場の経験にも基づかないような個々の教員の単なる趣きや思い付きが、大きな将来と可能性を持った若者を対象とする中等教育で、また当時の国際理解教育界に関わる多くの人々の期待と関心のもとにあった「新国際学校」において、到底許されるはずもない。当然そこには、学術的に裏打ちされた基本的な理念や原則が存在する。冒険と無謀とは紙一重ではあるが、理論や準備の全くない冒険的实践は、カルトになってしまう。

授業の準備・運営にあたって、背景に横たわっていたものは、次の通りである。

### 2.1 千里国際学園の学園の教育の基本理念

多文化教育、英知と行動力と友愛の心の育成、「小さな国際社会」  
少人数編成クラス（1クラス最大24名を標準とする）  
IB（国際バカロレア）の教育観や手法を導入する

### 2.2 OIA～SISにて引き継がれた、学校としての指導方針

討論・発表・論文作成の重視  
極端な受験進学向き指導の排除  
自主自立の、学習・生活習慣の醸成

### 2.3 社会科の出発時点で想起され、心に留めておかれた基本点

何より、生徒の参加感を重視し、生徒と共に歩む、生徒の反応に応じた授業展開（同行教育）を進めること  
討論・発表・論文作成の力をとりわけ重視し、安易な暗記主義に走らないこと  
帰国生徒たちの、海外での学習・生活経験を最大限に活かした授業編成にすること

## 3. “工夫”の背景

以上のような有形・無形の基本原則に基づいて、これから記すような様々な工夫を立案し、実施してきた。以下に紹介するのは、論文執筆の都合上、教科で唯一15年間在勤し、最も長期に渡って教科主任を担当してきた筆者個人の授業の範囲のものを主にしているが、これらは上に触れてきたような学園や教科の成り立ちがあってこそのものであり、社会科の専任教員・非常勤講師の先生方との協力関係があってこそ成立してきたものであることは明言しなければならない。

特に、初期の実践にあっては初代の教科主任を勤められた佐保吉一先生（現・北海道東海大学助教授）のご貢献によって立つ処は大きく、共に最も長期に渡って専任教員として勤務されてきた、シャミ・ダッタ先生、中村亮介先生、池田大介先生（教科着任順）との、およそ際限のない協議・提案・相互支援と相互啓発の中にあつての実践と報告である事を更に明示しておく。

また、共に学び切磋琢磨してきた生徒たちはもちろんのこと、授業担当学年の担任団の先生方を中心とするすべての学園の先生方、個々の思い付きを物理的に可能にしてくれた常に献身的な教務や事務の方々、疑問や葛藤にさらされながら新しい学校の教育の成果に期待してくれた保護者の方々、国際理解教育界の方々を中心とする校外にあつて支援やご助言を頂いた専門職の方々、など大勢の方々のご支援・ご協力とご助言にあつての実践報告であることも当然に明記しておくものである。

具体的にそのようなの方々との関係の中にあつて、実際に授業の企画・運営に反映された具体的な知恵やヒントには、次のような事柄がある。

帰国生徒たち、特に現地校で長期に渡って社会科の授業を受けてきた生徒たちから学んだこと  
国内一般生徒たちから学んだこと  
OISの教育や先生方から学んだこと

国内にて積み重ねられた、多くの実践者の経験や知恵から学んだこと  
これらが多面的・重層的に織り込まれての15年間の研究と実践であった事を、心に刻んでおかなければならない。

## 4. “工夫” の実際

### 4.1 カリキュラム・授業形式上の工夫点

#### ①オリジナル科目の開発

中高6年間の一貫教育という原則に基づき、地歴系の諸科目、公民科系の諸科目、それぞれについて重複箇所を整理し、独自の科目群を入れ込む空間を作り出した。もちろん、専任教員4名、非常勤講師1名という人員的な限界の範囲での工夫であるので、相当なやり繰りや関連部署との協議を経ての作業であったが、その空間に国際理解教育関係の科目や、討論・発表・論文作成に重点を置いた科目を設置する事ができた。現在、筆者の担当する科目は、「基礎社会3」（中学社会・公民的分野に相当）、「比較文化」（高校現代社会と総合学習に相当）、それに「地球社会と個人」、「知識の理論」、「スタディ・スキルズ」である。できる限り生徒の自由選択度を大きく取る、という学校の方針にあるため、生徒の自主的な選択によっても異なるが、6年間を通して、基礎的な学習から、中学・高校の学習の標準的な学習範囲を超える学習までの履修が可能な用意をしている。

#### ②オリジナル教材の開発・多用

OISの授業で使われる教員・生徒用の教材集を見ると、様々な質問が記載してあって、すぐに書き込んで使えるものがたくさんある。また、オリジナルの教材開発こそ教員の本懐とばかりに、様々な「作品」を、生徒と共に、日々熱心に創っている方もある。

筆者も啓発を受け、本学園の環境や学習者の様子に見合ったものをできるだけ開発するようになってきた。最初はふとした思いつきであっても、何回も使用して洗練することが肝心である。もちろん、駄作ですぐに廃棄したものもいくつもあった。

これについては、NGOでの開発教育の展開に関わってこられた先生方や、米国理解研究会の先生方との相互啓発によるところや、大阪府私学人研の指導員・先生方のご啓発によるところが大きい。

#### ③学習者全員との個別面談の実施

“生徒の質が変わった”といわれる数年前から、授業の最初の数時間を割いて、生徒全員と5—10分程度の個別の面談を実施し、個々の生徒との関係作りを兼ねて、授業に対する生徒のニーズや期待、これまでの学習経験や不安、などについて事前に把握するように努めている。3—4時間の授業時間数を要するが、数年間の長い付き合いの初めの段階において、これほど貴重な時間は無いと痛感している。

“大勢で楽しく学び合う”ようになれることが、やや抽象的ではあるが「公民的資質」の実際的なひとつの側面として考えてきたが、それには相当のスキルや経験の蓄積が重要である。家庭や、幼児教育、小学校教育の変化に伴って、大勢で過ごす経験そのものが極小化した環境で育ってきた世代の生徒たちは、反面、大人と個別に過ごすのは比較的得意な生徒が多い。そのチャンネルを通じて、初期の不安や戸惑いを早めにつかみ、数年掛けて“大勢で楽しく学び合う”ようになれるまで、段階的に人間的な成長も促していくように各種のソーシャライゼーションの課題も授業の中に置いている。

個別生徒と接する教育技術については、前任校である定時制高校の熱心な先生方に背中であげられたことや、本学園の歴代のカウンセラーの先生方に学ばされたところが大きい。

#### ④フィールド・ワークの実施と反映

各種研修機会や私費の活用の範囲であるが、海外の学校に赴いての長期の夏期休業期間に、社会科の授業にとって重要な拠点を中心に、教員自らが現地取材を敢行し、その成果を毎年の授業に反映させてきた。15年間に訪問してきた地域は下記の通りである。うち一部では、フィールド・ワークを実施し、現地の人々から様々な声を取材する事ができた。

フィジー（多文化共生）、サモア（伝統文化と「フォノ（和解のための民会）」の取材、現地校見学）、トンガ（日本文化との交流）、サイパン（戦跡）、ティニアン（原子爆弾搭載地点取材）、チューク（伝統文化）、グアム（戦跡）、パラオ（伝統文化や「板彫り」と戦跡）、ペリリュー（戦跡と集会見学）、ロタ（戦跡）、モルディブ（イスラム伝統文化と地球温暖化）、ブルネイ（イスラム文化と支持の強い独裁政治、現地校見学）、セーシェル（環境保護・福祉政策）、韓国（伝

統文化、独立記念館など取材、現地教員との交流)、上海(現地校との交流)、琉球諸島(本島・本島離島・宮古・八重山:伝統文化、環境保護、戦跡見学、など)、小笠原諸島(史跡見学)、カナダ(環境保護、多文化政策)、シンガポール(史跡、戦跡見学)、マレーシア(経済政策)、アメリカ合衆国(9.11 跡地や、現地の人々のインタビュー、現地校見学)、屋久島(環境保護)、水俣(公害)、北海道(先住民族文化)、イタリア(ルネサンス文化)、アラブ首長国連邦(経済政策)、オーストラリア(先住民族文化、多文化主義政策)、ハワイ(日系人文化)、タヒチ(太平洋文化)、などである。

生徒と共に公式なフィールド・ワークを行なう機会は無かったが、中には個人リサーチのために自ら現地に住み込んで直接取材を行って作品をまとめた者もあった。

これらの実現にあたっては、現地の方々の他に、日韓・アジア教育文化センターの先生方や、妻ら親族の全面的な協力を得た。

#### ⑤参加型学習の多用

「参加型」には様々な定義があるが、ここでは国連の提唱する人権教育を具現化した諸実践や開発教育の分野で盛んに用いられる、ゲーム形式やロールプレイ、シミュレーション形式を採りつつ、学習者の関心や理解の全般を高める手法を指すものとする。

「比較文化」では、70-90名の学年の学習者が一斉に介する週一度の時間を頂くことができ、最も「参加型」に傾斜した年度では、ほぼ通年で「参加型」を実践した。また、教育実習生にもできるだけ「参加型」のスタイルにチャレンジするように指導した。言うまでもないことであるが、「参加型」は、オリジナルの場合にそのモデル化の適切さが重要であり、また一時の体験に終わらせず、きちんとした事後検討と次の学習事項へ連動させるファシリテーションが肝要である。9年生から上級の学年に至る過程で、少人数で簡易な教材から、国際関係や歴史を題材とした複雑で高度なものに段階的に体験できるように編成した。学習者達の集団形成の成長と歩みを共にする、ということに意識を払っていることはもちろんである。本校の「参加型」の実践に対して、少人数編成のため他校で応用できない、とのご指摘を時折り受けてきたが、70-90名のクラスでの実践はむしろ標準的なクラス人数を上回るため、十分な汎用性・互換性が生じているものと思われる。

大学院で指導を受けた、国連の人権教育の推進者の横田洋三先生(現中央大学)に、授業で「参加型」を導入する確信を与えていただいた。実践にあたっては、学生時代に組織キャンプで先輩たちから受けたレクリエーションのトレーニングの経験が大きかった。また、シャミ・ダッタ先生が常に同伴者として、大規模な参加型学習の実現のパートナーとして常に絶大な協力をしてくれた。

#### ⑥獲得型学習の重視

学習者が自ら課題を見つけ、自分で過去の論点や関連情報や必要な知識を調べ、自前の結論を導き、それをプレゼンテーションやペーパーの形で発表する、という学習経験(ここでは獲得型学習をこう表現することとする)に重点を置いた。チーム・ティーチングの授業での実践であったが、シャミ・ダッタ先生が、テーマ設定からプレゼンテーションなどについて個別の指導にあたり、全般的な注意や論文作成の基本、自己採点・採点のルール、については筆者が担当することで歩調を取って来た。

特に国内校出身の生徒に多い誤解が、資料を転載することが即ちレポートであるという無意識の認識であったが、これは絶対に許さない、客観的な調査と主観的な結論を書きなさい、と何度も念を押して指導してきた。また、それぞれのテーマにとって必ず必要とされるであろう論点や、歴史・法律などの基本的な情報が欠けていれば、教員からヒントを与えることもする。さらに、「研究ノート」による紙上討論と、プレゼンテーション後のディスカッションの時間において、個人学習者のリサーチの実績を用いて、グループでその成果を共有し、発展的な学習をする。

他の教科でも実践されているノウハウの積み重ねと、年数を重ねての実践の成果ではあったが、多くの論者から「高校1年生では無理」「難しすぎるのでは」と指摘されていたものの、実際にはほとんどの生徒がこの関門を越えて行き、「しんどかったけどためになった」「最初は大変だと思ったけれど、やっているうちに面白くなって止められなくなった」との感想を残している。「リサーチが進路選びのきっかけになった」「大学での研究に役立っている」と、その後の報告をくれる者もある。

年度によって多少の違いはあるが、大多数の生徒が、調べたものを手がかりに自説を立てて表現する、という基準をこなしていく。3分の1前後の生徒は、多元的な考察を経て自分の意見を立てる、という社会科学の基本手順を見事に実現していく。数名は、大学の卒論にも匹敵するような精緻なリサーチを達成していく。

シャミ・ダッタ先生の豊富な経験と、つまづいている生徒の勘所を見抜く洞察力に多くを依存した実践であった。ま

た、図書館の全面的なアシスト、紙上討論に参加してくれた先生方や生徒たちのご家族・ご友人の方々のご協力の賜物であった。

#### ⑦応答式・対話式の講義型学習

とはいうものの、社会科学のひとつおりの基礎的なルーティンが身に付くまでの間は、教員がその体験が円滑に進むように時折りモデルを示しつつリードしなければならないし、それぞれの分野で一般に必要な論点についてひとつおりの洗礼を経しておくことや、時代の最先端の論点の揭示については、一義的には教員が担保しなければならない。かといつて一本調子の“講話”では、多感な年代の生徒たちの関心を維持する事が困難なので、講義型を用いるときにもできる限り応答と対話のプロセスに則るように心掛けた。このようにして、特に「比較文化」では、参加型・獲得型・講義型の3つの学習スタイルが互いに連動・補完するような効果を図る事を根幹とした。(本校紀要第7号 2002年刊 参照)

初代の OIS 社会科教員の一人であった、マーク・バック先生の授業の見学で得たヒントが出発点であった。

#### ⑧チーム・ティーチングの実施

1クラスに2教員が異なる役割で参加して授業効果を高める、という一般的な手法の他に、1科目内に3つの授業スタイルを設け、それぞれの授業スタイルを連動していく、という方式を採った。これは「緩やかなチーム・ティーチング」という独自の方式であり、人件費や時間割配置の限界という消極的条件をも結果としてクリアする事ができる方式でもある。両教員が、具体的な授業運営手法はもちろん、生徒の様子や学習習熟の度合いなどについても、時間的・心理的に“軽い負担”の中で常時協議でき、また、授業での問題が生じた際には協議の上で役割を分けて個別にそれぞれの側面から対応することにより、多層的・多角的な対処を試みることができた。

再び、パートナーであるシャミ・ダッタ先生の卓越した指導力に多くを委ねての試みであった。

#### ⑨メディア・リテラシー教育の実施

ヒロシマとパールハーバー、イラク戦争とメディア、北朝鮮の核開発、日本の物事を記載した世界各地の教科書、などのテーマを用いて、報道や教科書の記述がいかにか政治的な立場の影響を受けているか、や“国際誤解”について、実例を挙げて授業で比較している。創設当初は、海外現地校の経験の長い生徒で現地校の教科書を保存している場合があり、持参してきてもらって検討をしたりもした。もちろん、千里国際学園の立場や、筆者教員の立場もきちんと見抜いた上で授業に参加するように注意している。

何といつても、「善玉 VS 悪玉」の国際政治観を自ら克服しようとしてくれた歴代の生徒たちの“内面力”に感銘を受けた。

#### ⑩授業の進行と反対の意見・見解の奨励

筆者の担当授業の全てで「自由レポート」の制度を設け、授業の流れや結論、授業における支配的な見解、教員の見解や進め方に対する、異論・反論をレポートとして提出すれば、参加貢献度に加算する、という制度を置いている。採点基準は授業の流れに反対であって、根拠付けがハッキリしているもの、ということにしている。実際に、教員が気付かなかった留意すべき立場や学説について知らされたこともあり、授業に還元したものも多数あった。

何通も見解を出して授業を豊かにしてくれた多くの心豊かな生徒たちがあってこそ、意義を保った企画であった。

#### ⑪一定の条件設定のもとで、教員も自分の意見を述べる

上のように、学習者が学説と自己の論説を区別し、一定のメディア・リテラシーを身に着け、多元的な価値観の取材中からオリジナルの説を立てる経験をするという“聴く耳”を持った段階で、かつ反対意見が奨励され、成績・評価にむしろ有利になる、という条件設定のもとで、教員も真理を求めて彷徨う一学習者であるという事実に基づいて、自己の見解と断わった上で私見を述べて討論に加わったり、プレゼンテーションを行うことも、必要に応じて積極的に行った。

このようにして数年がかりのプロセスを経つつ、大学の非権威主義的なゼミのようにして生徒と教員が共に意見交換をする中で、(i) 教員が既存の通説を代弁する作業の弊害としての、権威主義対反権威主義の不毛な議論が淘汰できる (ii) 真理を教員が手中にし代弁しているのではなく、共に模索する存在であることにより却って真理の遠さや崇高さが伝わる (iii) 議論のプロセスを経て学習者の見解の方が有力な見解としてクラスで承認を受ける (実際に多々あった) 可能性が生じ、学習意欲の向上が見られる というような効果が見られた。

教養（リベラル・アーツ）の考え方に基づいていた大学で、筆者が学生時代に得た学習環境が有為に働いての実践であった。

#### ⑫ “進度” の影響の極小化

できるだけ学園の生徒の現状に見合ったリアルタイムの教材開発を、と意気込んできたが、その動きに対して最も負の影響を与えるものが“進度”である。すべてのクラスで（場合によっては別の教員のクラスとも）同じ内容を、同じペースで、同じ時期までに終える、という非合理的な考え方は、何を起源としていたのだろうか。

学園の財政的・物理的限界のため、近年は実施がしばしば困難になってきているが、同じ内容を複数のクラスで実施するのではなく、クラスの進展に応じて様々な進行をするようにしてきた。大まかな骨格と勘所は定めておくものの、ディスカッションが「はずむ」クラスでは生徒の勢いに任せ、別の観点の指導が必要なクラスではそこに重点を置く、など、クラスごとに“進度”がバラバラになっても、最もそれぞれのクラスの実態に適した授業進行を進める事を試みた。教員側の負担も相当であるので、今は一部授業での実践としているが、できるだけそのように進めることを心掛けてきた。“進度”と言う条件をひとつはずすだけで得られた果実は実に多種であった。

研究会などで共に悩みを交換してきた、たくさんの先生方との懇談の中で、このようなひとつの核心の発見があった。

#### ⑬ 学習指導要領の遵守

本稿に記しているような、様々な要素を盛りだくさんに取り込んだ本校の社会科（中学社会、高校地歴科・公民科）カリキュラムは、しばしば独自過ぎるものと誤解されるが、6年間スパンで見ると、一条校として問題のないように、学習指導要領のほぼすべての項目を満たし、それ以上の深さと広さを内包するように組まれている。

ただし、各学年における一時的な“進度”は、一般的なものと比べるとかなりのズレが生じる。そのため、他校の友達との情報交換や、比較的若い学年で模擬試験を受ける生徒が不安を感じる事があり、じゅうぶんな説明を要している。例えば途中で転校する生徒に対しては個別の対応が必要になるので、個々の状況に応じてフォローできる体制を用意している。

大学受験においては、推薦方式ではリサーチの取り組みがむしろ有利に働いているようであり、討論や発表を中心とする学習実践に理解のある大学からは、学校として幸い多数の指定枠や推薦枠を頂くことができている。

しかしいわゆる暗記物を中心とする進学先や、受験に特化した対応が必要な難関校に際しては、個人の努力におもねるところが大きい。近々、また指導要領の変更が行われる社会情勢であるが、すべての学校と同様またはそれ以上に、本校社会科は常にこのような動向に注意し、学習者の負担や負担に応える用意を怠ってはならない。

歴代の社会科のすべての専任・非常勤の先生方との協議の成果や、個別の知恵の具現化によるものである。

## 4.2 科目や授業の、内容上の工夫点

#### ① 平和学の成果の導入

本校には、「世界のために何かをしたい」「気の毒な環境にある子供たちに、何にもできないけれど何かをしたい」と熱望する生徒が、毎年少なからず存在する。

開設当初より、高校2～3年生対象に自由選択科目「地球社会と個人」を設置して、身近な問題がグローバルな問題に関連していることについて中心的に扱ってきたが、数年がかりの準備の末、実質的に平和学の入門的な授業となるように位置づけてきた。また、9年生からの授業において、ことあるごとに「非暴力」や「紛争の平和的解決」を扱うようにしている。

筆者が学生時代にゼミで指導を受けた最上敏樹先生（国際基督教大学）が、当時はまだ数少なかった平和学の指導者であり、多くの学恩を受けたが、その後国連平和大学や、紛争解決・平和構築の機関が世界に多数設置され、平和学は今や世界的なニーズのもとにあるようになった。国内においては平和学や平和研究の設置と普及については、まだまだ立ち遅れが指摘されるものの、近年は大きな関心が寄せられるようになってきている。

国内での狭義での平和教育の系譜と、北欧を拠点に世界的に広がりを見せる平和学の接点を模索する事を課題として、高校生向けに体系だった平和学の基礎を教える授業を、毎年試みている。2004年からは、『平和を創る発想術』（岩波書店 2003年刊）を主要テキストの一つと位置づけ、著者のガルトゥング先生（国連コンサルタント他）から直接のお励ましも頂くことができた。トランセンド研究会、平和教育研究会の先生方との情報交換も重要なリソースになっている。

## ②北欧スタディ

元 SIS 教員の佐保吉一先生の全面的な協力を得て、北欧の平和学、地球市民意識や国際協力の背景、文化・伝統・歴史・福祉社会についての独自単元を設置している。北欧社会は、平和協力や国際機関への貢献、世界の紛争解決や高度福祉社会の建設など、日本社会の今後の参考になる様々な事例を多々秘めているが、国内の研究者が少なく、研究や教材化があまり進んでいない。このような現状にあって、北欧社会の現状や歴史についての様々な学習機会を得られたことは貴重である。

## ③社会科学の根本命題を早期に扱う

性善説と性悪説、テクノロジーの発展の功罪、戦争の廃絶の可能性、平等社会と競争社会、など社会科学では、結論は出ないが、誰もが一通りの見識を持たなければならない事柄がある。上級学年になってから個別の論題を論じている間に、これらの通過儀礼の不十分さや未消化の様子が背後に見え隠れするようでは、常に議論がスタックする危険性がある事を何度も経験してきた。これらの根本命題を正面から論じあうディベートの機会を9年生で作っている。中学生くらいの年代の方が、思い切って様々な論点を展開し、気楽に世界観を述べ合う様子を見てきている。ディベート教育の実際については、国内でのパイオニアの一人である渡部淳先生（日本大学）に様々なご教示を得た。また、適切なパズル問題を用いて、社会科学的な観点とはどんな見方なのか、を9年生の授業の最初に示すようにしている。

## ④人物研究の重視

国内の社会科学の“立ち遅れ”の中でも、大いに目立つのが「人物研究」である。（行政学の故・渡辺保男先生の生前に、直接ご意見を聞く）ヒトラー、ガンジー、チャプリン、D・マッカーサーなど現代史の重要人物について、生い立ちや経歴から言動を探る授業時間を9年生で置いている。

## ⑤人文科学との接点

併設のインターナショナル・スクールでは、社会科の授業と英語の授業がジョイントで行われている学年がある。特定の社会問題について、理論と作品の両面から理解を進めるための設定である。筆者の授業においても、その後に学習者の負担を考慮すべき、との配慮から少々中座しているが、オーウェルの『1984』やトマス・モアの『ユートピア』を必修読本としてみたこともあった。その他各種のSFものなどを扱いながら、トータルに学習効果を高める試みを実践している。もちろん、OISの教員に多くの啓発を受けての実践である。

## ⑥一般書の講読

中高生向けの書籍や資料だけではなく、一般向けの書籍や資料を読みこなせるように、学習段階に応じて、科目内容に応じた一般書の購読を奨励している。少々の手引きがあれば、簡単な一般書は9年生でも難なく読解していけることを実感する。中でも、法哲学の長尾龍一先生の著作には、簡単でありながら含蓄の深い著書が多く、直接の教材としている。

## ⑦「文化相対主義」を正面から採り上げる

多くの国際理解教育の実践例は、特定の文化（人物、料理、遊び、ことば、など）との交流を通じて、間接的に文化相対主義を体得することを主眼としているが、本校の場合は、文化人類学や文化相対主義の歴史を正面から取り上げ、個人のリサーチや日々の学習の根本軸のひとつとして学んでいる。生活素養としてのみならず、研究の態度としても位置づけることにより、個々の生徒が特定の文化と接する機会ばかりではなく、個人のリサーチ学習や、生徒相互の学習においても意識されることになる。文化学習の基本手法については、近年引退された大森元吉先生に、専攻外ながら学生時代に受けた学恩によるところが大きい。また、文化人類学の研究の実際やその教材化については、文化人類学専攻の非常勤の今里拓哉先生に大きなご助力を頂いた。

## ⑧「多文化主義」を自校の観察から検証する

本学園の教育理念の第一に挙げられているのが「多文化教育」であるが、ホーム・ステイ・プログラムを通して毎年の交流のあるオーストラリアの多文化主義の実例を参考に、自校の多文化主義や多文化教育の実際を検証する授業時間を設け、身近なコミュニティの多文化共生について、意識的に考察・提案ができるようにしている。

ホーム・ステイ・プログラムの歴代の担当の先生方に度々のご協力を頂いた。

### ⑨「地球市民意識」と正対する

抽象的なキャッチ・コピー的な意味合いではなく、「地球市民」の理念や実像に、実例や人物学習を入れながら、地球大に事物を捉えるトレーニングをする。また、地球市民意識の普及のための政策立案を、KJ法を用いてグループで模索する機会を置いている。かつて「地球市民教育センター」に集った先生方やNGOの職員の方々と共同の学びが、常に研鑽の機会と支えとを与えてくれた。

### ⑩「集団無責任」制としての、大戦期以降の歴史理解

大戦の解釈として、いわゆる「自由主義史観」「左翼史観」など様々な歴史解釈や歴史教育観がそれぞれの立場から深く論議されているが、筆者は学園創設当初よりイデオロギー的に一貫した歴史教育観の模索作業そのものから脱却し、時代時代において日本社会や、政治リーダーが、果たして人間工学的に合理的で経営学的に常識的な組織作りや意思決定をしてきたか、という点からの考察を中枢に置いての授業を試みてきた。これは平和学という「文化的暴力」として、日本社会に厳然と未解決のまま存在し続けており、日本社会で学ぶ多くの若者にも無意識のまま継承されている。(個の自立度の高い帰国生徒たちの中にあると、例えば集団の中に自己を隠匿させて個の最大利益を図る処世術の存在は却って目立ち、結果として学習・生活集団の質を低下させていく要因となる様子が容易に見て取れる)

歴史家諸氏の論点も、左右の立場を超えて、その点についての問題意識はほぼ共有されているように読める。併設インターナショナル・スクールなどで用いられているIBの教育においても、歴史の教育では、ある特定の時代をテーマにして、まず歴史学の「手法」の習得についての手ほどきを学習者が受け、その後に学習者が成果として示すべきと期待されているのは、任意の主題における学習者自らの立説と証明である。評価は、結論の採った“価値”に対してではなく、学習者が用いた「手法」や「手順」(数学でいう「証明」の方法)の適切性に対して行われ、個々の教員ではなくIBのオフィスが最終的な成績評価を与える。IB当局からは、個々の教員が適切に「手法」を教授できたか、も審査される。

そもそも、筆者の専攻していた国際法学の教科書では、単一の結論のみが権威的に学習者に与えられていることはありえず、各説併記の上で著者の考察が記されており、学習者の自発的な仮説の構築が期待されている。本来、社会科学はそのような姿をしているものではないだろうか。

### ⑪日本社会の問題点について集中的に取り組む

上記の集団無責任(南博先生の仮説)の他、日本社会に固有の様々な因襲について整理して扱い、特に国内一般生徒や海外日本人学校生徒たちの多数が無意識に身につけている文化的な暴力を自ら克服する機会とし、「国際社会リテラシー」の向上に努めている。また、その解決のために、グループ・ワークやリーダーシップ・メンバーシップの意思決定の実習の単元を9年生から設置している。

実践のきっかけは、ユース・ホステル協会で受けたグループ・ワークのトレーニングであった。これらの授業の理論的な体系化にあたっては、直接お会いしてご見解をうかがうことができた、故・網野善彦先生の日本史の歴史教育に関する数々の示唆に啓発された点も大きい。

### ⑫人類史としての歴史観の試み

上級学年の自由選択クラス「地球社会と個人」では、国際法学や国際機構論の論説を軸に、世界大の歴史観の醸成の試みを行っている。主権国家システムの成立の以前と以後の国際社会の枠組みの根本的な違い、国際機構の発展、普遍的国際機構の成立、主権国家システムの修正、国際法の進展、などについて、独自の時代区分を設けて近・現代史を捉えてみる試みを行っている。この分野では歴史学の入江昭先生が先見的な研究を行っておられ、今後の教材研究の主要な課題の一つとするものである。

### ⑬現代史重視

筆者が授業を直接担当しているものではないが、教科として、「近現代史」の科目を設置し、のちにさらに現代史に重点を置く「国際関係史」の授業科目を設置するようとしてきた。“指導要領”と“進度”との軋轢から、社会科の既存のいずれの科目においても現代史や国際関係の分野の履修が後手に回ることへの反省からである。教科では、歴史系の科目をあまり採らない生徒はなるべく「国際関係史」の授業を選択するように呼びかけてきた。年度によって差があるが、毎年過半数の生徒がこの授業を選択している。

筆者は、このような教科のカリキュラム編成に基づき、この既習を条件として、国際関係に関する高度なワークを含んだ授業を運営できているため、本稿に記述の必要性を感じたものである。

#### ⑭学習スキルの習得に特化した授業の設置

本学園で授業を進めるに際して、帰国生徒が、比較的国内の一般的実践に近い形態をとる授業での学習につまずくのは、習熟度やレベルの差というより、学習者に暗黙に期待されている自発的な学習態度や学習習慣が明示的に教授されていないことに原因があることが多い、と経験的に感得された。海外の学校では、例えば他の地域からやって来た学習者に対しては、学習習慣や方法を教える「スタディ・スキルズ」の授業が設置されていたり、ESLの時間に実質的に学習スキルの指導が行われていたりする。世界各地の学校からやって来る生徒たちが共に学びあう本学園においては、本来学習スキルの論点は全校的にその確保のための議論がなされるべきであるが、単一の科目としては筆者が試みとして数年来設置し、試行錯誤中である。外国人教員の授業についていけない国内一般生徒、日本人教員の講義・テスト中心の授業で戸惑う帰国生たちの姿が、この授業設置の直接的な動機であった。

ただし、体系だった学習スキルの習得の重要性については、けして海外帰国生の存在が契機になったわけではなく、国内の実践でも古くから気付かれていた。国内での学習スキルや、学校・教員、そして保護者が努めて創造すべき学習空間・時間と環境の重要性については、筆者の中学生時代の恩師である松下静男先生（元・甲南大学）がたまたまご専門であったこともあり、改めて直接に様々なご指導を授かることができ、著書の『おしえ・そだて・まなぶ』（震災による出版社の廃社で絶版のため、著者より直接購入）を授業の主要なテキストとすることができた。

「スタディ・スキルズ」の授業は、その後様々な生徒が選択したが、帰国生徒の適応という当初の狙いから、観点が徐々に移行している。国内一般校からの転入生徒が経験カリキュラム型の授業になじめない問題や、就学年齢と渡航・帰国時期の問題から、どの学習段階においても学習スキルの指導を受けていない生徒のニーズが高まり、近年は学習障害の論点とも関わって、位置づけが変わってきている。しかし、このような変遷にもかかわらず、学習スキルの充実した指導の論点は学園全体で考える段階にきていると思われ、またどの学校においても意識されるべきである。

開校間もない手探りの時期に、スキルの悩みの存在の大きさについて気付かせてくれた、オープンな心の持ち主達である生徒たちに出会わなければ、実現しようもない実践であった。

#### ⑮“考える”事を考える授業の設置

IB（国際バカロレア）科目では、どの生徒も履修すべき必修の授業の一つとして、“Theory of Knowledge”の授業が設置されている。これは、科学の成り立ちや学習の仕組み、各教科や分野の構造、「知」そのものへの哲学的な洞察、などを主眼とするIBの根幹科目である。OIA/SISにおいても、当初よりIBそのものの認可を受ける事が困難であっても、上述の通りIBの理念はなるべく科目の編成や教科の指導の中で活かすこととされてきた。

筆者は、「倫理・社会」の科目との兼ね合いの中で「知識の理論」の授業を設置・担当し、命題とパラドクス、論理的な考え方、科学哲学、西洋・東洋哲学史、などを扱いながら、「知」そのものへの考察を主眼とし、生徒たちと共に探し物を行ってきた。知識が、単に目の前の作業に役立つものでも、受験のための実用必要上のものでなく、「知」そのものの魅力について一旦理解が進むと、「教養」への窓口が開けてくるという効果がある。日本社会の議論習慣の未習熟性について早くから指摘し、実践的な著書も数多く出版してきた小野田博一氏の一連の著作をテキストとしている。これらの実践の背景には、筆者の学生時代にパラドクスの研究や教育に力点を置いておられた数学者の野崎昭弘先生の授業実践から得た影響によるところが大きい。

また、この特設授業のみではなく、個別の授業においても、記憶のメカニズム、集中力を高めるエクササイズ、パズル問題などを扱い、知ること・考えること、そのものに対する興味と探求の興奮とを味わえる機会を作るようにしている。

#### ⑯論理的な思考・発言習慣の醸成

上記「知識の理論」の授業では、論理的な考え方について特別なテキストを用いて集中的に学ぶテーマの一つとしているが、これはできるだけ早い段階で身につけることが望ましい教養人の習慣である。中でも、「結論と根拠を必ずセットで述べる」「反論は結論に対して行う」「事柄（意見）と人柄（人格）とを区別する」など、最も基本的な習慣は9年生時に習慣づけられるように繰り返し指導し、各学期に必ず実施するディベートでは、「論理性」「明確性」「一貫性」等についても生徒に相互採点してもらっている。知識偏重のいわゆる“おたく”型の学習者に変化を促し、感情的な発言を慎み、討論を楽しめる観点について、後々に効果が見えてくる。渡部淳先生の『討論や発表を楽しもう』（絶版のため出版社特別購入・貸し出し）を全員必携としている。学園内の先輩教員の真砂教務部長も、自ら論理的な思考に関する授業を設置・担当しておられる。

#### ⑰ “インプット・フリー” のリソースの準備

“ゴール・フリー”の教育ということが一時盛んに謳われたが、インプットがフリーでなくては、ゴールのフリー性にも限界がある。併設インターナショナル・スクールと合同施設のため、図書館が和洋様々な図書を揃えつつ、司書教諭・図書館員すべてがリサーチ教育に対して協力を惜しまないという環境は換えがたいものである。それに加えて、マルチ・メディア資料の将来的な重要性を想定して、開校準備期間から社会科のビデオ・ライブラリーを作り、社会科の教科に関連する資料やTV番組をストックして、学習者の自由な利用に充てている。執筆現在、約2,000本に約16,000の番組が収録されており、学習指導要領に示されている項目はもとより、およそ中等教育の社会科の関心事項のほとんどのテーマについて視聴覚資料が存在し、その一部は授業でも積極的に活用することとしている。また、マルチ・メディアのリソースからの「読み取り」や「聴き取り」の重要性についても着目し、ビデオ資料からの書き取りやメモ・ノートを作るスキルについても、9年～10年の間に段階的に習得できるようにしている。

これら資料の整理とインデックスの作成や管理については、たくさんの卒業生、及び保護者ボランティアの徳峰さんらのご尽力によるところが大きい。

一方、インターネットの資料については活用が非常に難しい。「比較文化」でチームで教えているシャミ・ダッタ先生の発案で、個人のリサーチにおいて、まずは個々のテーマについて中心的な書物を1冊選んでブック・レポートを書き、その上でネット資料を活用することと合議している。

## 5. 展望と反省

以上、改めて15年間の歩みを振り返ってみると、当時の国際理解教育界にあった様々な人々の願いの結晶として実現された「新国際学校」において、大きな役割を果たすべき社会科に期待されていたことが、果たしてすべて実現できたか、という問いに駆られる。“案ずるより生むが易し”、とはいうが、“生みの苦しみ”自体も相当な重圧であった。

世界各地からの教員や生徒が集まった新しい学校の教科づくりという、千載一遇の機会を完全に活かしかれたかどうか、と問われると、不十分な点が今もまだ多く目に付く。恥ずかしながら筆者が真っ先に健康を壊して職場をリタイアしたが、教科の教員が次々に職場を離れる事を余儀なくされた。ある朝、普通に登勤してみると、私以外が全員休んでいた、ということも実際にあった。不十分なながらも、気力・体力の続く限り私たちができうることには全て挑戦し、たくさんの成功も失敗も経て、15年の陶冶の結果、今のところ残っている成果が、上に挙げてきたものである。

私立学校の命は特色であり、国内数千校の私学にはそれぞれオンリー・ワンの輝きがある。本校社会科においても、冷静な社会科学の伝統の基礎の上に、国際理解教育にふさわしい授業を日常的に試みている処としての特色の構築を、ずっと目標にして取り組もうとしてきた。

一方、日本の教育の国際化は遅々としているようで着実な進展を見せ、旧来の帰国生徒教育の様相や手法は一変した。このような中で、果たして伝統の地面に立脚しつつ、かつ新たな時代の要請にも応えられる、オンリー・ワンの教科体制や授業を今後も創り続けるチャレンジができるか、いや、今チャレンジできているかどうか、について、心底からの確信が持てないようになってきている。

ゴールはどこにあるのだろうか。終わりのない旅路を、相当に減価償却した背骨に鞭打って、背伸びをしながら展望すると、更に意欲的な研究と実践の必要性が痛感させられる。初代校長・藤澤皖先生のご退任の言葉が「羽ばたけ、若き地球市民」であったが、それは私たち教員たちからみて若いティーン生徒たちに向けてだけではなく、年長の先生から俯瞰されていたところの、教員を含む学園コミュニティのすべての関係者に向けられていたことに、今、殊更に思いをめぐらせている。

<終>